

令和 4 年 4 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00020

研究課題名（和文）思想史的研究に基づく「道徳的運」論の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of "moral luck" theory based on intellectual studies

研究代表者

古田 徹也（Furuta, Tetsuya）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：00710394

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、偶然という要素が不断に織り込まれた世界という観点から、自由や意志という概念、および人生の意味や幸福といった価値をどのように見出すことができるかについて、古代から現代に至る西洋倫理学の議論を跡づけ、再考する研究を遂行した。とりわけ、あらゆる価値を偶然の所産として受けとめつつ、特定の価値にコミットして生きる、というアイロニカルな人間のあり方について、また、世界に生じる事態の一切を偶然として受けとめた場合に、世界のなかになお自由や価値を見出すことができるかについて、西洋の思想史を跡づけつつ解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

疫病、自然災害、あるいは思いもかけない僥倖、等々、我々の社会には「運」の要素が不断に織り込まれ、この要素に大きく左右されているように思われる。そうした不確実性のなかで、自由や意志という概念、および人生の意味や幸福といった諸価値がいかに見出され、確保されるかを、思想史の展開を踏まえて検討し直す本研究の成果は、この要素をしばしば等閑視しがちな哲学・倫理学の傾向性を批判的に捉え直す学術的意義をもつと同時に、社会において過度に虚無主義に傾く風潮や過度に自己責任を強調する風潮などに抗する論理と視角を提示する意義をもっている。

研究成果の概要（英文）：In this study I examined the concepts of freedom and will, and values such as the meaning and happiness of life from the perspective of a world in which the element of luck is constantly woven, by tracing the thoughts of Western ethics from ancient times to the present day. In particular, I traced the outline of the philosophical discussion about the ironic human condition of "living committed to a particular value while accepting all values as the product of contingency", and I clarified the question of whether freedom and value can still be found in the world if all the situations that occur in the world are taken by luck.

研究分野：現代哲学・現代倫理学

キーワード：運 偶然 自由 人生の意味 幸福

## 1. 研究開始当初の背景

「運」という、人間にはコントロールできない要素 生まれや育ちといった要因や、偶然の結果といった要因 に人生はしばしば左右される。日常の生活においては大抵の人が認めるこの事実は、哲学や倫理学の議論の内部ではしばしば無視されてきた。特に、理性によって意志をコントロールする合理的で自律的な責任主体 として人間を捉え、運の影響を受けない至上の価値 として道徳を位置づける近代のカント主義的な倫理学は、人間は運をどう捉え、運とともにどう生きるべきかという問題を倫理学から排除してきたし、その傾向はカント主義以外の倫理学理論全体にも広がっている。すなわち、道徳的な善し悪しの判断に、運という要素が影響を与えてはならない という原則や、道徳に従った善き生は、決して運によって揺るがされることがない という教説が、広範に行き渡っているのである。

本研究の背景にあるのは、この傾向を思想的観点から批判的に捉え直す必要性への認識と同時に、同様の批判的観点を有する現代の「道徳的運」論もやはり批判的に再検討しなければならないという認識である。というのも、運の要素を重視する現代の議論は、ともすれば、古代ギリシアの多様な思考を画一化して懐古主義的に称賛する傾向を有するからである。それゆえ、思想的展開の具体的な内実をあらためて確認する必要があるのである。

## 2. 研究の目的

以上の問題意識を背景に、本研究では、運という要素が不断に織り込まれた世界という観点から、自由や意志という概念、および人生の意味や幸福といった価値をどのように見出すことができるかについて、古代から現代に至る西洋倫理思想の展開を跡づけつつ再考することを目指した。とりわけ、あらゆる価値を偶然の所産として受けとめつつ、特定の価値にコミットして生きる、というアイロニカルな人間のあり方について、また、世界に生じる事態の一切を偶然として受けとめた場合に、世界のなかになお自由や価値を見出すことができるかについて、思想的展開を辿り直しつつ解明を行った。

## 3. 研究の方法

具体的には、本研究は以下の三種類の研究を遂行しつつ、さらにそれを総合する全体的視座から、道徳と運の関係を捉え直す研究を行った。

(1)「籤(くじ)」という方法を軸に据えて、人々の生活や社会において「偶然に頼る」この方法がどう位置づけられ、どのような役割を担ってきたのかについて、古代ギリシアと現代における空想的事例を題材にし、両者を比較することで浮き彫りにする方法を採った。

(2)あらゆる価値を偶然の所産として受けとめつつ、特定の価値にコミットして生きる、というアイロニカルな人間のあり方はいかに輪郭づけられ、人生の意味や幸福の追求といかに折り合うことができるのかにめぐって、古代懐疑主義および現代のトマス・ネーゲルやリチャード・ローティらの論点を検討し、それぞれの類似性と差異を整理した。

(3)世界に生じる事態の一切を偶然として受けとめた場合に、世界のなかになお自由や価値を見出すことができるかについて、現代のルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの議論を跡づけつつ、古代ギリシアの諸議論との比較を行った。

## 4. 研究成果

上記(1)に関しては、一方では、社会的に重要な局面でくじ引きが多用されていた古代ギリシア文芸作品や哲学的著作に目を向け、空想的事例に登場するくじ引きについて、その位置づけや特徴などを探りつつ、他方では、くじ引きにまつわる現代の空想的事例である「臓器くじ(サブバイバル・ロッター)」を取り上げて、両者を比較しつつ、次のような結論を導いた。すなわち、かつては「神聖さ」というものがくじ引きの本質的な特徴であったこと、また、くじ引きという手法が最も相応しいのは、それが強者たちによる積極的な選択である、ということである。そして、くじ引きが神意と結びつき難い現代では、くじ引きの否定的な側面が照らし出されやすいことを確認した。以上の成果は、論文「くじ引きは(どこまで)公正なのか 古代と現代における空想的事例をめぐって」(『法と哲学』第7号、信山社、77-104頁、2021年6月)として公開しているほか、今後、共著の書籍として関連する成果を公開する予定である。

次に、(2)に関しては、現代の論者リチャード・ローティとネーゲルがそれぞれの仕方、あらゆる価値を偶然の所産として受けとめつつ、特定の価値にコミットして生きる というアイロニカルな人間のあり方を主題的に論じている次第を跡づけたうえで、「アイロニズム」を標榜するローティが哲学への懐疑を表明するその議論の道行きそれ自体が、古代ギリシアの懐疑主義の議論を反復する部分を含むことを指摘し、哲学的思考の根深さとその可能性を確認した。以上の成果は、学会発表「偶然とアイロニー 英米圏の現代哲学の一断面をめぐって」(比較思想学会第48回大会シンポジウム「運命と偶然」、2021年6月26日)として発表したほか、今後、論文化を行う予定である。

さらに、(3)については、「永遠の相の下に世界を捉える」という、西洋哲学・倫理学におけ

る伝統的な視座を踏まえて、現代の論者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインがこの種の視座の下で人生の意味や幸福な生といったものをどう導き出すのかを検討した。そして、彼の議論がおおよそ以下のような理路を辿ることを確認したうえで、そこにあらわれる世界観、運命観、幸福観といったものが、古代ギリシアのストア派などにおけるそれと共通した部分が認められることを指摘した。前期ウィトゲンシュタインは「意志」という言葉を、日常的な意味での意志

世界内に生起する現象としての意志 と、それとは別の意味での意志という二通りの意味で用いており、永遠の相という(彼にとっての)実相の下で捉えるならば、前者の意志は存在しない。そして、後者の「意志」とは倫理的なものの担い手のことであり、「善き意志」あるいは「悪しき意志」のいずれかに分けられる。善き意志の担い手たる主体とは、永遠の今 たる現在のなかに生きる「認識の生」の主体である。認識の生の主体は、「神の意志」 あるいは、神の声たる「良心」 に一致する。神の意志は、世界(ないし運命)と一致する。したがって、認識の生の主体は世界と一致する。そして、世界と一致した調和的な生が、幸福な生と呼ばれるものである。(逆に、世界と一致しない不調和な生が、不幸な生と呼ばれるものである。)以上の成果は、論文「前期ウィトゲンシュタインにおける「意志」とは何か」(『現代思想』2022年1月臨時増刊号(Vol.49-16)、青土社、105-116頁、2021年12月)論文「意志・幸福・神秘 前期ウィトゲンシュタインにおける「倫理的なもの」をめぐって」(『哲學』第73号、83-95頁、2022年4月)および図書『はじめてのウィトゲンシュタイン』(単著、NHK出版、2020年12月、全320頁)のほか、各種の学会等発表などにおいて公開しており、今後も公開を続ける予定である。

そして、以上の個別的探究を踏まえたより総合的で一般的な観点から、本研究では、道德と運の相克や、運が織り込まれた生の実相といった論点をめぐって、図書『不道德的倫理学講義 人生にとって運とは何か』(単著、筑摩書房、2019年5月、全368頁)および図書『いつもの言葉を哲学する』(単著、朝日新聞出版、2021年12月、全296頁)をはじめとする諸論考を公開している。これらの成果によって本研究は、否応なく運に曝される我々の現実の生をありのままに捉えたうえで、その現実と切り結ぶための具体的な展望を開くという、社会とその制度にとって本質的かつ実践的な目的に貢献するものとなっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 34
2. 論文標題 まだ説明は終わっていない：意志の自由をめぐるウィトゲンシュタインの思考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実存思想論集	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 33
2. 論文標題 倫理学は「運」をどう扱うべきか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化交流研究	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 7
2. 論文標題 くじ引きは（どこまで）公正なのか：古代と現代における空想的事例をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法と哲学	6. 最初と最後の頁 77-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 49-9
2. 論文標題 自由意志の有無について考える前に考えるべきこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 49-16
2. 論文標題 前期ウィトゲンシュタインにおける「意志」とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 105-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古田徹也	4. 巻 73
2. 論文標題 意志・幸福・神秘：前期ウィトゲンシュタインにおける「倫理的なもの」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 良い患者であることの何が問題なのか 「合理的な選択」とは別の仕方
3. 学会等名 医療・介護従事者のための死生学オンラインセミナー（東京大学人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 意図と自由と責任の一筋縄ではいかない関係
3. 学会等名 第20回東京大学生命科学シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 言葉が表情をもつとはどういうことか 多義性についての一視座
3. 学会等名 基礎言語学研究会設立シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 研究に「倫理」が必要な理由
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会シンポジウム「研究倫理をどう考える：原理、行動、執筆・投稿に向けて」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 前期ワイトゲンシュタインにおける「意志」とは何か
3. 学会等名 本哲学会第80回大会学協会シンポジウム「論理と倫理：『論考』100年を機に」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古田徹也
2. 発表標題 偶然とアイロニー：英米圏の現代哲学の一断面をめぐって
3. 学会等名 比較思想学会第48回大会シンポジウム「運命と偶然」（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 古田徹也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 はじめてのウィトゲンシュタイン	

1. 著者名 古田徹也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 不道徳的倫理学講義：人生にとって運とは何か	

1. 著者名 古田徹也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 朝日新聞出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 いつもの言葉を哲学する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------